

京都大学附属図書館報



Seishu The Kyoto University Library Bulletin

静脩

2002年3月

Vol. 38, No. 4

宮崎市定コレクション 西洋刊の地理書と古地図

名誉教授 礪波 護

平成13(2001)年6月、京都大学附属図書館は総合博物館の開館記念協賛企画展「近世の京都図と世界図」を博物館北棟の展示室で開き、A4判80ページからなる美しい『近世の京都図と世界図 大塚京都図コレクションと宮崎市定氏旧蔵地図』と題する解説図録を発行しました。この企画展は、図書館が最近寄贈を受けて貴重書庫に別置することになった二つのコレクション、すなわち京都在住の実業家、大塚隆氏の収集による江戸期から近代にいたる京都に関する地図の体系的コレクションと、京都大学文学部の東洋史学教室を長年に亘って主宰された故宮崎市定名誉教授(1901年~95年)が、1936年から38年まで、文部省在外研究員としてパリに滞在中に蒐集した西洋古版地図及び地図帳の中から、逸品を選んで公開したものでした。

「大塚京都図コレクション」については、寄贈に尽力された金田章裕教授が、展覧期間中に「近世京都図の特性」と題して講演され、その要旨は本誌『静脩』の前号に掲載されました。「宮崎市定コレクション」については、近畿地区国公立大学図書館協議会との共催で9月21日にAVホールで開催の、平成13年度第一回附属



図書館講演会で、私が話すことになりました。

文化功勞者として顕彰され、『宮崎市定全集』全25巻(岩波書店刊)の著者として知られる、東洋史家の宮崎は、地理学や地図史にも関心を持ち、第二次大戦直後の一時期には地理学講座の教授を兼担しますが、地理学教室との縁は、京都大学に入学する大正11(1922)年にまで溯ります。松本高等学校の学生時代に政治家を志していた宮崎が、京都大学の文学部を受験して東洋史を専攻するようになったのは、同文学部の地理学を卒業した浅若晃教授の適切な助言によるそうです。京都における下宿先も、浅若が住んでいた吉田山東麓の浄土寺町でした。

大学を卒業して教室の副手となり、研究者の道を進んだ宮崎は、恩師である東西交通史家の桑原隲蔵に指示され、ゲオルク・ヤーコブ著の『西洋に於ける東洋の影響』の抄訳を作成し、史学研究会の『史林』に3回連載されました。欧米の優越感を少しも感じさせないヤーコブの論考から受けた学恩は大きかった。一年志願兵として、兵役の義務を終えた宮崎は、岡山の第六高等学校教授をへて、昭和4（1929）年春に第三高等学校教授に着任しました。いずれも桑原隲蔵の配慮でなされました。

三高教授として、東洋史だけでなく、西洋史の授業を担当した宮崎は、京大文学部の講師として授業を担当しました。その際、昭和7年度から東洋史教室で宋代の制度や党争などを講義したばかりか、翌8年度から三年間、地理学教室で「支那地理書講読」の授業を受け持ち、西洋刊の地理書や古地図への関心を深めました。

「支那地理書講読」の受講生名簿の中に、後に著名な地理学者となる米倉二郎・織田武雄や、中国地理学を専攻する日比野丈夫らの名前が見えるのです。



三十歳代の半ばに、三高教授から京大文学部の助教授に転じた宮崎は、文部省在外研究員として滞在する国にフランスを選びました。宮崎は二年間を超えるフランス留学中、機会を見つけてヨーロッパ各地を旅行し、とくに1937年9月から二カ月半に亘って西アジア各地を歴遊した結果、史上における西アジアの先進性を確信し、帰国後に「東洋のルネッサンスと西洋のルネッサンス」といった東西交渉史に関する論考を執筆し、紀行文『菩薩蛮記』を出版します。

宮崎は、パリ滞在中、ヨーロッパで出版された、イエズス会士の編纂にかかる中国に関する地誌や報告書といった、歴大な古書を購入するかたわら、パリ市内に何軒となくある銅版画専門店やセーヌ河岸の古本店で、稀覯本の地図帳Atlasの外、地図帳から出たハナレものの地図Mapを蒐集しました。たとえば、イエズス会士であるマルティノ・マルティニ（衛匡国）の1655年刊『中華新地図帖』、デュ・アルドの1735年刊『中華帝国全誌』全4冊、1638年刊のリンズホーテン『航海誌』のフランス語訳本、1897年にストックホルムで刊行のノルデンシェルド『ペリプルス』英語版といった西洋刊の地理書の稀覯本、1513年刊のエシュラー/ユーベリンの「現代インド図」、ともに1550年刊のミュンスター「アメリカ図」と「アジア図」、1584年刊のヨルゲ「中国図」、1608年頃刊のオルテリウス「アジア図」、1658年刊のヤンセン「中国図」です。宮崎がこれらの地図帳や銅版古地図の収集に鋭意努力したのは、渡欧直前まで地理学教室の授業を担当して、西洋におけるアジアの地図史に強い関心を抱いていたからです。

宮崎は、これらご自慢の洋書や地図帳・地図には「宮崎氏滞欧採蒐書印」と刻した朱印を捺し、それらの地図を眺めて楽しむだけでなく、折にふれて地図を活用した緻密な論考を発表して、地図の変遷からみた東西交渉史論を展開したのです。ヨーロッパで刊行された中国地図帖の双璧は、ブラウの地図帖として有名な、

マルティノ・マルティニの『中国新地図帖』と、ダンヴィルの地図帖として知られるデュ・アルドの『中華帝国全誌』全4巻の随処に挿入された、42葉の近代的な地図ですが、宮崎はこれらの両方を購入しています。

チロル生まれのイエズス会士マルティニは、1643年に多数の宣教師をともなって中国に入り、明末清初の動乱期に中国各地を巡回して貴重な見聞記を書くかわら、主要都市の位置を測量し、ローマ法王庁に帰る途中に立ち寄ったアムステルダムで、地図学者ヤン・ブラウの大地図集『新地図帖』の一部として、1655年に『中国新地図帖』を公刊しました。これは、ヨーロッパにおいて出版された最初の中国地図帖です。明の陸応陽の『広輿記』を底本として作り、ダンヴィルの『中国新地図帖』が出るまで、ヨーロッパで最も信頼すべき中国の地理書として尊重されました。

パリ生まれのデュ・アルドは、イエズス会に入り、もっぱら編纂の仕事に従事しました。かれが在中国の宣教師から送られてきた書簡・研究などをたくみに編集して『中華帝国全誌』を出版した際、パリの王室付地図師のダンヴィルが作成した多数の中国地図を挿入しました。ダンヴィルの地図は、清の康熙帝の命によって、1707年から10年の歳月をかけ、イエズス会士を中心に近代的な実測によって作成された中国全図『皇輿全覽図』に基づき、その実測は、北京を通過する子午線を基準経度と定め、中国本土はもとより、辺境の各地を含む約700地点の経緯度を天文測量などによって決定したのです。『中華帝国全誌』は1735年にパリで出版され、フォリオ判全4冊からなる巨帙でした。翌年にハーグから縮刷のクォールト判として出された際、42葉の地図はすべて省かれましたが、その翌1737年に、同じハーグの書肆から別冊の『中国新地図帖』が刊行されました。これが一般にダンヴィルの地図帖と呼ばれているものですが、もともとはパリ刊のデュ・アルド『中華

帝国全誌』の随処に挿入された地図類を一冊に纏めたものです。

今からちょうど百年前、宮崎が生まれた明治34(1901)年の、12月16日付『大阪朝日新聞』に、宮崎の恩師の一人で、当時は朝日新聞社の論説記者であった内藤虎次郎(号は湖南。1866-1934)は、黒頭のペンネームで、「京都大学図書館記念展覧会」と題する詳しい観覧記を書いています。この文章は筑摩書房刊『内藤湖南全集』全14巻には未収録ですが、内藤湖南を特集した『書論』第13号(1978年)の全集補遺に収められています。その4年前に創設された京都帝国大学は、勅令では法・医・理工・文の各分科大学を有するものとされながら、当時東京帝国大学においてさえ文科大学の学生は定員に満たなかったということもあり、京都の文科大学だけは開設が遅れていましたが、大学附属図書館はすでに開館していたのです。

この図書館観覧記によりますと、その開館第二周年記念として去る八日より三日間、京都地理に関する図書の展覧会が開かれたので、内藤が初日に参観したところ、今しも関西文庫協会例会の最中であって、富岡謙三が図書館に対する希望を述べた演説をしていましたが、その趣旨は、寺院に於ける古板本、古抄本の收拾を京都大学に望み、字書索引の整備を各図書館に望んでいたそうです。

参観記の終わりに、この日の来観者は富岡鉄斎ら考古好事の老大家を始めとして、青年の文士もあって、ここかしこで談論湧くがごとく興があった、と記したのち、展覧以外の珍書としては、新宮涼庭の寄贈にかかる書の一であるとして、島文次郎館長らが示したのは、西暦1737年パリ(正しくはハーグ)出版の清国地図で、著者の名をダンヴィユ(D'Anville)という、と述べていたのです。奇しくも百年後、附属図書館の主催によって京都の地図に関する大塚京都図コレクションと宮崎市定コレクションの優品の展覧が行われ、西暦1737年パリ(正しくは八

ーグ)出版の清国地図ではなく、デュ・アルドの1735年パリ刊『中華帝国全誌』全4冊が展覧されました。そして関西文庫協会の後身に当たる、近畿地区国公立大学図書館協議会との共催で、今回の講演会が開かれたこととなります。

第二次世界大戦の時期、文学部の地理学講座を主宰した小牧實繁教授は、ドイツ地政学の学風に共鳴し、『日本地政学宣言』(1940年、弘文堂刊)などを出版し、特殊講義にも「日本地政学」を講じました。敗戦後、小牧教授と室賀信夫助教授らが辞職した際、宮崎は地理学教室の主任となって同教室の再建に努め、自由主義者の織田武雄を助教授に招請したのです。

宮崎は、織田武雄『地図の歴史』(1973年、講談社刊)の序において、「十六世紀のオルテリウスのアジア地図などには、奇怪な形状をした日本・朝鮮が、いとも自信なげに描かれている。しかし知的には臆病そうに見えても、それは同時に逞しい意志を中に秘めている。いかなる困難をも冒し、どんな犠牲を払ってでも未知の世界に挑戦し、実態を極めねばやまぬぞという船乗りたちの凄まじい意欲の成果が、その裏に潜んでいるのである。さてこの地図を前にした当時の人たちの間には、一航海ごとに巨万の富を手に入れ、あこがれの貴族の地位に近付こうと野心を燃やす商人もあつたであろう。また、そんな成功者を見習って一獲千金の夢を抱き、これから危険な遠征に旅立とうとする無一文の青年もおつたであろう。その傍らには、地図に描かれた呑舟の怪魚を指さして、息子の冒険を思い止まらせようと、涙ながらにかきどく母親がいたかも知れない。」と書いていました。

宮崎が言及した、オルテリウスのアジア地図(1608年頃刊)も、宮崎市定コレクションに含まれています。今回の図録『近世の京都図と世界図』で綿密な解説をしたための京都大学名誉教授の應地利明さんは、織田の高弟であるとともに、学生時代から宮崎の学風を景仰し、論著を読破してきた方ですが、このオルテリウスの

地図の解説で、「アジア全域が黄色く彩色されていて書き込みが容易なためか、宮崎は、中国から西域へと至る多くの欧文地名に赤インクで漢字地名を添記していて、この地図を楽しみつつ読んでいた様子を彷彿とさせる。宮崎にとっては、たとい古地図でも自由に書き入れをおこなうなど、それらは研究と趣味のための私的資料であって、決して骨董品ではなかったのである。その書き入れに導かれて地名をたどると、マルコポーロが帰国の際に出立した……」と書いています。今では一枚が数十万円もする古地図のあちこちに、朱筆でかきこみをしているのです。宮崎が蒐集した古地図は、あくまでも研究と趣味のためのものでした。

八十歳をすぎた頃、宮崎は雑誌記者の質問に対し「よく、京都大学の学問のやり方は趣味的でいかん、と批判されますが、私は逆に、趣味的にやるのが本当の学問だと思っている。それを実証したのが、私の『論語の新研究』ではなかったでしょうか」(「論語読み」の愉しみ)と答えています。西洋刊の地理書や地図も、同じやり方で対応したのでした。

宮崎がパリで西洋刊の地図を採集していた時のライバルは、朝日新聞社パリ支局長の渡辺紳一郎(1900 - 78)でした。渡辺の地図蒐集の苦心談は、渡辺の講演録である「古地図あれこれ」(『ピブリア』第32号、1965年)に詳しく描かれている。古地図・地球儀・天球儀特輯と銘打たれた『ピブリア』の同号には、織田の講演録「世界地図の発達」や、宮崎の論文「マルコ・ポーロが残した亡霊 カタイ国が消滅するまで」が掲載されています。また平成9年6月に神奈川県立歴史博物館の開館30周年記念特別展「世界のかたち日本のかたち 渡辺紳一郎古地図コレクションを中心に」が開かれ、同名の解説図録が刊行されています。

宮崎市定コレクションの地図のうち、1550年刊のミュンスター「アメリカ図」のカラー複製は、大型図録の織田武雄・室賀信夫・海野一隆

編『日本古地図大成・世界図編』（1975年、講談社刊）に採録された外、1982年には外国の航空会社が配布した古地図カレンダーにも採用されました。そしてミュンスター「アメリカ図」は、同じ「アジア図」とともに、金田章裕編集代表の『京都大学所蔵古地図目録』（2001年、京都大学大学院文学研究科刊）の巻頭図版として複製されました。この古地図目録は、平成12年度京都大学教育改善推進費（学長裁量経費）の交付を受けて刊行されたもので、「宮崎市定コレクション」のうちの西洋刊の地理書と古地図の目録が、東洋史の杉山正明教授によって作成され、「宮崎市定氏旧蔵地図」と題して収録されています（P.150～P.166）。

〔宮崎市定の西洋刊地図関係論説〕

南洋を東西洋に分つ根拠に就いて

『東洋史研究』第7巻第4号 1942年

パリで刊行された北京版の日本小説その他

『日出づる国と日暮るる処』1943年

十字軍の東方に及ぼした影響

『オリエン』第7巻第3・4合併号 1965年

マルコ・ポーロが残した亡霊

『ピブリア』第32号 1965年

織田武雄著『地図の歴史』序 1973年

は、全集第19巻および磯波護編『東西交渉史論』中公文庫

は、全集第22巻および『日出づる国と日暮るる処』中公文庫

は、全集第24巻および『遊心譜』中公文庫

（となみ まもる）



嵯峨本『史記』など古活字版諸種について

京都大学附属図書館訪書の記

神戸女子大学 助教授 仲井 徳

昨秋の一日、京都大学を訪問し、貴重な蔵書を拝見させていただいた。

写本の重文のかずかずの横顔を拝見して、眼福これに勝るものなく、至福の一日でした。刊本では、整版の高野版の粘葉装、奈良絵本、漢籍の種々と活字版では、古活字版及び近世木活字版に至るまで拝見させていただきました。

〔写本〕

重文

拾芥抄 3冊 袋綴装(5針眼訂) 舟橋蔵書
長根歌併琵琶行秘抄 1冊 袋綴(5針眼訂) 舟橋蔵書
周禮正義 15冊 袋綴装(4針眼訂) 兵範記 25巻
長承元年(1132)年~承安元年(1171)

〔版本〕

高野版

往生礼讃 1冊 粘葉装(糸綴じ補修) 建長3年(1251)7月刊
梵字悉曇字母並釈義 1冊 粘葉装 正平7年(1352)2月25日刊
上新請来経等目録 1冊 袋綴装 建治3年(1277)刊

<古活字版は別記>

奈良絵本 弁慶物語 1冊
妓王 2冊
阿国 1冊

整版 年代略記 1冊 袋綴装 横本 慶長期刊力
莊子 10冊 袋綴装 萬治2(1659)年刊 陽明文庫蔵印

近世木活字本 聖武記附録 4冊 袋綴装

中で、とりわけ興味を惹かれました古活字版について駄文を弄してみようと思います。

周知のとおり、古活字版は江戸時代初期、1590年頃から50年ほどの間に突如として興った、主として木の活字による印刷出版物です。それまでの整版による印刷から活字を使用した印刷技術は、イエズス会が布教に使ったキリシタン版(印刷技法はグーテンベルクの鉛鑄造に

よる活字印刷術から来ています)の影響が強いと言われていますが、大ぶりで雄渾な書体・大版でどっしりした造本から古来より古活字版として珍重されてきました。主として木彫の活字により約400点が刊行されています。

私が所属する「書誌学研究会」(私立大学図書館協会阪神地区)では、古活字版の活字印刷技法を解明しようとしてきました。鑄造の活字ですと1つの字母からいくつも同一の活字が作れるのですが、木彫の活字は文字通り1コマずつ手で彫るので、どこかで差異が生じて同一の活字は作れません。そこが木活字調査の面白いところです。印刷された版面から1コマづつの活字の形態と種類について住所録を作成します。各々の活字の使用頻度を調べることで、その印刷工程までを解明できるのです。これまでに、勅版の漢詩集『錦繡段』と嵯峨本の謡本『浮舟』について活字調査を終えました。

現在は、古活字版のうち『浮舟』以外の「嵯峨本」の活字調査を進めているところですが、図らずも、今回嵯峨本『史記』を拝見することができました。

『史記』が角倉素庵(1571 - 1632)によって慶長4年(1599)に開版されたこと、「嵯峨本」と総称される一群の出版物の最初のものであることは、最近の研究成果により確認されています。

「嵯峨本」は京都洛北の鷹が峰の工房において出版された、『伊勢物語』や『観世流謡本』等、現在全部で17点出版されたと言われています。「嵯峨本」の特色は 木彫の活字それも変体仮名による連続活字も使用 料紙に雲母(きらら)模様による下地が施されている 絵入り本がある 優雅な綴葉装(てっちょうそう)の糸綴じ造本がある わが国の文学作

品を初めて印刷・出版した。さらには底本・校訂がよく、それ以降の定本になった等で、世界で最も美しい本のひとつです。

「嵯峨本」の出版につきましては、これまでは本阿弥光悦（1558 - 1637）が中心となって出版し、角倉素庵が手伝ったとされていたのが、ここにきて素庵中心説が有力になりました。

嵯峨本は近年各方面から注目を浴びて、次の各分野からたくさんの論考が出版され総合的に研究されてきていまして、たいへん喜ばしいことです。

- | | | |
|---|-----------|--------------|
| ア | 国文学 | 本文批判による年代推定 |
| イ | 美術史 | 俵屋宗達の係わり |
| ウ | 筆跡 | 光悦流（風）・角倉素庵流 |
| エ | 装訂 | 綴葉装の特色 |
| オ | 料紙 | 紙師宗二の印章 |
| カ | 雲母（きらら）模様 | 京都「唐長」の襖製法 |
| キ | 絵入り | 奈良絵本の関係 等 |



さて、古活字版について、嵯峨本『史記』の書誌事項を記します。

130巻50冊 袋綴装（とじ穴は5針眼訂・大本）
刊記ナシ ただし、慶長4（1599）年に角倉素庵が開版・刊行したことは文献（林羅山の『羅山先生集』）から分かっています。雷文牡丹模様を空押しした大ぶりの丹表紙（原装、原題簽 32.4cm × 21.3cm）四周双边 無界 半丁8行、行17字 活字は漢字のみで大字と小字がある。旧蔵者谷村太一郎氏の「秋邨遺愛」の朱印記あり。箱入り 箱書に「嵯峨本史記」と墨

書あり。

漢籍ですが、「嵯峨本」の成立を考察するのに重要な出版物です。



さらには、天皇が出版なされた「勅版」のうち、後陽成天皇による慶長勅版『日本書紀神代巻』 2巻1冊 袋綴装（4針眼訂・大本）渋皮表紙（原装、原題簽、29.2cm × 20.5cm）四周单边 無界 半丁8行、行17字 漢字で大・小字あり。大きな力強い字体である。慶長4年（1599）刊（刊記は「日本書紀慶長己亥季春新刊」と大きく特色があります旧蔵者鈴鹿三七氏の「鈴鹿氏」の朱印記あり）も拝見することができました。国書出版の嚆矢です。

徳川家康も出版事業には熱心でした。慶長5年に『貞観政要』を出版しましたのを伏見版と呼びますが、その翻刻古活字版『貞観政要』10巻10冊 袋綴装 元和元年（1623）刊、また家康が隠居した駿府で銅鑄造活字により出版し



た駿河版『大蔵一覽集』 10冊 袋綴装（4針

眼訂・大本) 茶色表紙(原装30.3cm×20.1cm、書き題籤) 四周双辺 有界 半丁 8行、行17字 漢字で大・小字あり。慶長20(1615)年刊(同年の元和元年の識語あり)等を拝見することができました。

少し詳しくメモを取りました3点を見ていて、漢文のものばかりですが、出版者がそれぞれ異なりますのに版式が似通っていることに驚かされます。

以上の優品の数々はもとより管見によります

もので、九牛の一毛、正確を期したとは言えませんので、ぜひ原物にて調査されますようお願いいたします。

最後に、吉田松陰ゆかりの尊攘堂史料一式を、山県有朋が明治4(1871)に認めた扁額『尊攘堂』ともども拝見でき感激いたしました。京都大学附属図書館の皆さまにはたいへんお世話になりました。厚くお礼申し上げます。以上
(なかい いさお)

附属図書館所蔵『幼学指南抄』が重要文化財に指定されました。

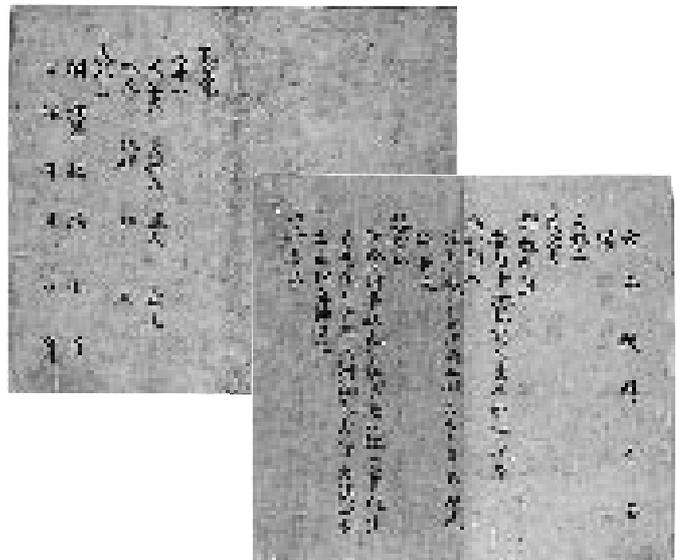
情報サービス課 雑誌・特殊資料掛

平成14年3月22日、当館所蔵「『幼学指南抄』第七、第二十二中」が国の重要文化財に指定されました。

『幼学指南抄』は平安時代末期に編纂された類書で、ほとんど原本に近いと思われる古写本が唯一部のみ現存する貴重な典籍です。当時の代表的な漢籍類、『禮記』や『論語』などを天部・歳時部・人部・火部などの事項のもとに編纂した漢籍の一大分類文集で、文中の引用書には、今日佚書となっている『晋令』『廣州記』などの逸文も伝えられています。全体は目録一巻、本文三十巻の計三十一帖からなるものでしたが、現存は本文二十三帖のみとなっています。本書の書名は、唐代の徐堅等撰による類書『初学記』に模して、「初学」を「幼学」となし、抄出して「抄」として編纂せられたところにあるとされています。

本館所蔵の『幼学指南抄』第七巻の内容には

「人部一・二」が、同第二十二巻の内容には「巧藝部下、方術部、火部下」が当てられています。二帖の各巻末には他巻とおなじく「覺瑜」の名がみられ、さらに第二十二巻の元表紙には、原姿が三十一巻からなっていたことがわかる「卅一冊之内」との墨書がみられます。体裁は粘葉装となっています。



経済研究所図書室紹介

経済研究所図書掛長 金森孝之

経済研究所図書室は、1962年4月京都大学に附置された経済研究所に設置されました。京大のOPACで経済関連の図書を検索すると所蔵館に経済学部の経済と並んで経研と出てくるでしょう。たまに、経済と経研と間違えて来られる方がおられます。経研は、比較的新しい図書室ということもあり、蔵書冊数は約8万冊と少ないです。経済研究所図書室は附属図書館本館の西隣にあります経済研究所の2階の奥にあり、少々分かりにくいかもしれませんが。本部棟が建設されますと、その北側になります。春になりますと、研究所の前には、しだれ桜が満開となりまして、京都大学内の環境美化に貢献しております。掛事務室は南側にあり、閲覧室は北側にあります。閲覧室には、カード目録、新着雑誌、Econ-LitのCD-ROM版、検索用端末などを配置しています。Econ-Litは、経済学のデータベースとして定評があり、学内のLan上でも提供されていますが、CD-ROM版は、簡単に独占して利用できるということで、人気があるようです。閲覧室のさらに奥は書庫棟になっており、3層構造の積層書架になっております。最上階の3層には、洋図書、洋雑誌、2層には、和図書、中国図書、1層には、和雑誌が収められています。

当図書室の特徴については、経済研究所要覧に「本研究所の主要な研究課題である日本経済の産業構造の実証的な、分析、研究という目的にそって、それに必要な内外の図書文献ならびに資料等を体系的に収集してきた。特に戦後日本の経済活動に関する官庁統計資料、民間統計資料は各分野にわたって収集を行った。今後は戦前の統計資料ならびに外国の統計資料の充実をはかっていく計画である。現在、統計資料として和書668種、洋書123種を蔵している。」と

なっています。以上のとおりですが、その他の資料として、経済学洋図書が充実しております。また、中国関連の年鑑類はよくそろっています。

当図書室は、どなたでも利用できますが、書庫への入庫は、経済学部院生を除きまして制限しております。入用な資料について、OPAC、カード目録などで請求記号等を調べてから、カウンターに申し出てください。貸し出しは用紙に記入してもらうこととなります。又、雑誌、年鑑などは禁帯資料となるため、当日中の一時貸しとしております。

当図書室の特別な活動といたしましては、経済研究所は経済資料協議会の会員となっております。他機関と協力いたしまして、「経済学文献季報」作成に協力してまいりました。近年、冊子体として刊行してまいりました季報は刊行中止となりましたが、その核となるデータベースは引き続き、国立情報学研究所より経済学文献索引データベースとして提供されております。経済学文献索引データベースは、経済学と、これに関係のある分野の国内刊行の和文・欧文雑誌・ディスカッションペーパー約1190誌に掲載された論文と記事を収録しております。これは、我が国の主要な経済学分野の学術雑誌を網羅しております。これまで、情報学研究所の情報検索サービスは個人別従量制という体系で実施されておりましたが、新しく機関別定額制も導入されると聞いております。私たちの作成しております経済学文献索引データベースが誰にでも自由に利用できることを希望しております。

また、どこの図書館、図書室とも経費の節減には努力していると思っておりますが、製本費用は、頭の痛い問題です。当図書室では、製本機を使って雑誌製本して利用に供しております。多くの大学から寄贈されます紀要、各種統計等につ

いてはこの簡易製本で保存するようにしております。

当図書室は、小さいですが、充実した経済学の蔵書を所蔵しており、経済学を学ぶ人にとって、京都大学内で必要不可欠な施設となっております。

(かなもり たかゆき)



第14回国立大学図書館協議会シンポジウム(西地区)に参加して

文学部 閲覧掛 藤山 優美

昨年11月28日、29日の2日間にわたって第14回国立大学図書館協議会シンポジウム(西地区)が開かれました。第13回のテーマが「電子ジャーナルの導入と外国雑誌収集のあり方」であったのに続いて、今回は「電子ジャーナルとコンソーシアムの形成」でありタイムリーなテーマであったと思います。ただ、工学部から文学部に異動して以来「電子」という言葉には縁遠くなってしまった身にとっては、状況が把握できるのか、講演内容が理解できるのかいささか不安を抱いての参加となりました。

最初に千葉大学の土屋図書館長より「大学改革の核としての電子図書館」というテーマで国立大学図書館協議会電子ジャーナルタスクフォースの活動、成果を交えて基調講演がありました。そのお話し振りからメンバーの方々が従来の業務や研究に加え多大な労力を払われたことが窺えました。タスクフォースは、Elsevier Science社の雑誌価格問題が契機となって国立大学でのScience Directの導入をはじめ、他社の電子ジャーナルの契約に向けても協議するといった趣旨で設置されました。このタスクフォースのおかげで、コンソーシアム形成の足がかりとなり、大学によっては来年度の洋雑誌コス

ト増の抑制や導入タイトル数の増加ができたことは大きな成果だと思います。続いて各大学から電子ジャーナル導入状況や利用教育担当者研修、コンソーシアム形成について事例報告がありました。

各報告から共通に感じたのは導入への調整と予算確保の難しさです。どの大学も、利便性はもちろんですが、高騰する外国雑誌への対応策として電子ジャーナル導入による重複タイトルの整理に踏み切ったという事情がありますが、教官や研究者がタイトル決定権や予算を握っている現状においては、経費負担率等をめぐる調整は想像以上に厄介なものである事を目の当たりにしました。琉球大学における200数十回にもおよぶ運営委員会での検討、負担額をめぐっての学部間の“攻防”での関係者のご苦労と気苦労は察して余りありません。コンソーシアムについては奈良先端科学技術大学院大学が事務局となり、NTTや松下電器、近畿大学農学部図書館などがメンバーとなっている「京阪奈ライブラリーコンソーシアム」が異色でした。産と学、地域との連携の視点からまた国立大学という中立的立場から窓口を務める意義があると報告されていましたが、運用ポリシーや役割意

識をしっかりと持っていないと、ややもすると一方に偏ったり煩雑な調整事務処理のみを引き受けることになりかねないとの危惧も感じました。

シンポジウムの内容を理解できるか不安を抱いての参加でしたが、講演や報告は今後の大学図書館のあり方を考える上で刺激となりました。特に北海道大学附属図書館の坂上事務部長の特別講演は、電子ジャーナルの導入からコンソーシアムの発達、海外コンソーシアムの現状など、素人の私にとっては大変参考になりました。シンポジウムを振り返って最も考えさせられたのは、電子ジャーナル関連の予算を始め、大学図書館の財源をいかに確保し運営するかに今後真剣に取り組まなければいけないということです。コンソーシアムの形成と参加はその一手段にすぎません。タスクフォースの活動のおかげで文部科学省より電子ジャーナル導入経費

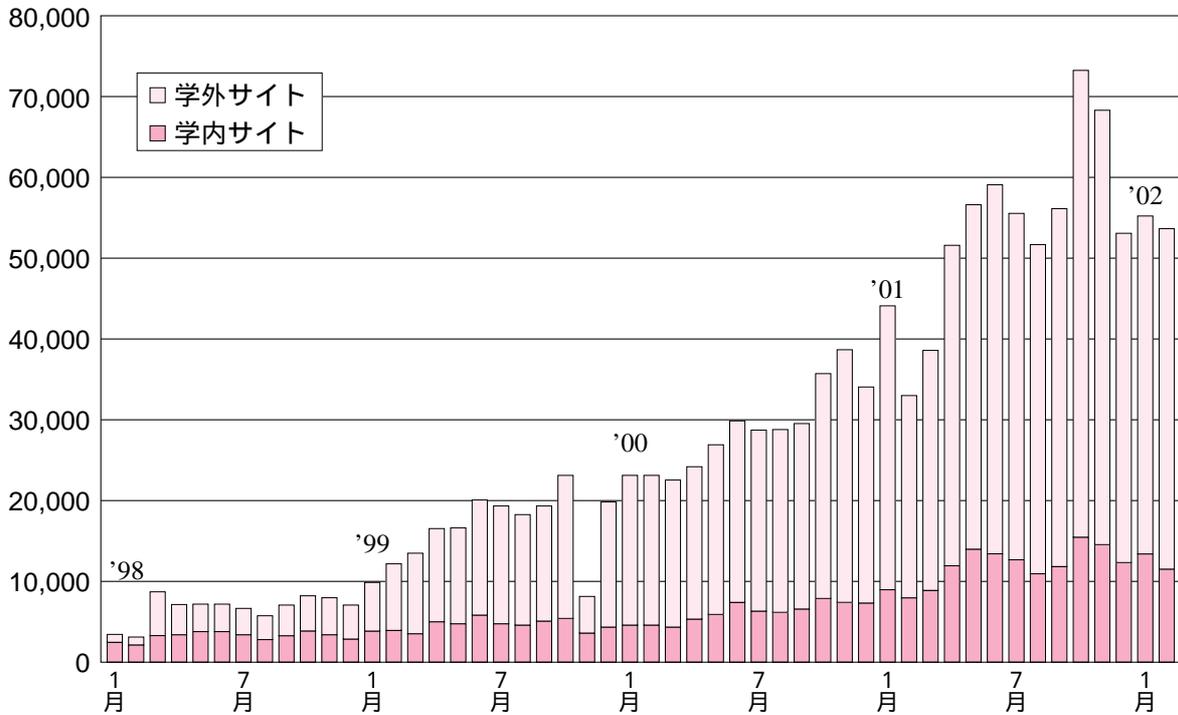
が措置されました。また、昨今の科学技術関連部門への重点配分や大学予算配分方式の変更は追い風となり得ます。しかし一方で学生用図書購入費が大幅に削減されるなど重点分野以外への影響もでています。仮に配分方式の変更を利用して大学分から図書館予算を確保できたとしても、運用を誤ると、予算減となった教官を始め利用者の支持は得られません。最近、アメリカの大学運営に関する講演をきく機会がありました。アメリカでは学術研究と大学の経営を熟知した専門家が運営にあたっているとのことでした。土屋図書館長が「現タスクフォースメンバーは任期切れや息切れ」と言われていましたが、もはや図書館職員個人の熱意だけでは限界にきているのではないのでしょうか。日本の大学図書館にもマネージメント専門のスタッフを養成・配置することが必要だと思います。

(ふじやま ゆみ)

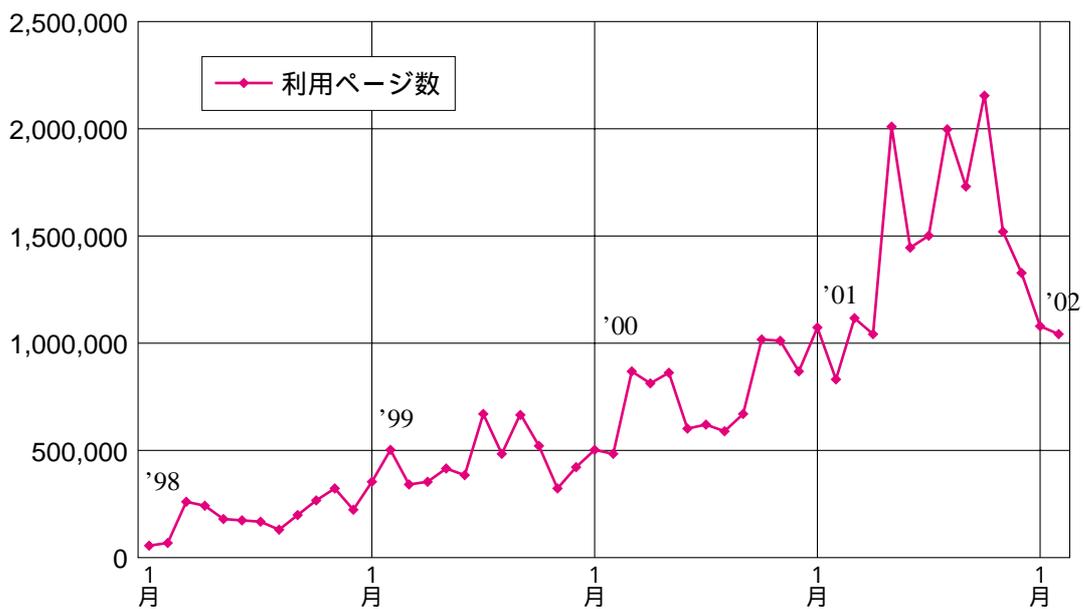


電子図書館利用状況(1998年 ~ 2002年2月)

利用サイト数



利用ページ数



図書館業務用電子計算機システムの更新

情報管理課 システム管理掛

昭和61（1986）年に図書館業務用電子計算機システムを導入し、以来、図書館業務の電算化の適応業務拡大を図ってきました。本年1月には、第5期目にあたるシステムの調達を行い、業務用システムは富士通（株）製iLiswave、電子図書館システムは富士通（株）製iLisSurfを導入することとなりました。

前回（平成10年1月）のシステム更新は、それまでの、中型汎用機によるホスト集中型システム構成から、クライアント・サーバ方式のオープンシステム化への転換と電子図書館システムの新規導入という大きな更新となりましたが、今回は前システムのコンセプトを引き継いだ更新となっています。

導入されたシステムのハードウェアは、前システムと比べて、約1.5倍の性能・機能をもち、サーバはUNIXサーバ群を中心とし、クライアントシステムはWindows2000ProfessionalをOSとする業務用パソコン240台が、附属図書館の他50ヶ所の図書（館）室に配置され、KUINSを介してネットワーク接続されています。今回の更新にあたっては、前回システムのコンセプトを引き継ぎながらも、（1）多言語対応システム（2）ネットワークセキュリティの強化について特に留意したものとなっています。

（1）多言語対応システムは、国立情報学研究所（NII）の目録所在情報サービス（NACSIS-CAT）で提供される中国語と韓国・朝鮮語の所蔵情報に対応しています。

このことにより、OPACにおいては、エンド・ユーザのパソコンに中国語（繁体字、簡体字）や韓国・朝鮮語のUCSフォントがインストールされており、使用するインターネットブラウザが、これら

のUCSフォントの表示が可能であれば、これらの文字が表示可能となっています。

エンド・ユーザのパソコンが、これらの条件を満たしていない場合は、中国語と韓国・朝鮮語は、のキャラクタで表示されます。また、当分の間、多言語対応OPACと従来のOPACを検索画面で切り替え可能にし、併用して提供しています。詳しい内容については、OPACのページで紹介いたしております。

（2）インターネット環境の整備、成熟とともに、一方では、セキュリティに充分配慮したシステムを構築することが、サーバ管理・運用者に強く求められています。図書館システムも現在対応すべき、セキュリティに配慮したシステムを構成しています。

業務システムにおける新機能については、業務担当者向け説明会を開催し解説を行っていますが、利用者サービスにおける新機能については、その運用開始とともに、サービス毎に、附属図書館ホームページなどで紹介させていただきます。

教官著作寄贈図書一覧（平成13年12月～14年2月）

所属等	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
名誉教授	田口 義弘	オルフォイスへのソネット	河出書房新社	2001
名誉教授	興膳 宏	乱世を生きる詩人たち	研文出版	2001
文学部教授	石川 義孝	人口移動転換の研究	京都大学学術出版会	2001
経研助教授	岩本 康志	社会福祉と家族の経済学	東洋経済新報社	2001
理学部教授	尾池 和夫	図解雑学 地震	ナツメ社	2001
情報学研究科教授	野木 達夫	Japan Journal of Industrial and Applied Mathematics Vol.18No.2	紀伊国屋	2001
総人教授	富田 恭彦	Inquiries into Locke's Theory of Ideas	Georg Olms Verlag	2001
農学研究科教授	増田 稔	木材科学講座9 木質構造	海青社	2001
医学部助教授	豊國 伸哉	Free Radicals in Chemistry, Biology and Medicine	OICA	2000
人文研教授	阪上 孝	フランス革命期の公教育論	岩波書店	2002
工学部教授	足立 紀尚	Modern Tunneling Science and Technology Vol.1,2	A.A.Balkema	2001
名誉教授	本庄 巖	言葉をさく脳しゃべる脳	中山書店	2000
名誉教授	本庄 巖	脳からみた言語	中山書店	1997
名誉教授	本庄 巖	Language Viewed from the Brain	KARGER	1999
農学部助手	大田伊久雄	森林ビジネス革命	築地書館	2002
高等教育講師	溝上 慎一	大学生の自己と生き方	ナカニシヤ出版	2001
経済学研究科助教授	黒澤 隆文	近代スイス経済の形成	京都大学学術出版会	2002
農学研究科教授	林 力丸	Trends in high pressure bioscience and biotechnology	ELSEVIR	2002

シネマ&CDコンサートについて

附属図書館では、2月から3階AVホールで毎週木曜日午後2時から映画会とCDコンサートを始めました。

映画会は「シネマ・コレクション」というタイトルで映画館、レンタルビデオ店では、なかなかお目にかかれない質の良い古典名画を選んで上映しています。2月は今は亡き映画評論家の淀川長治氏の解説付き、チャップリンの「キッド」、3月には「黄金狂時代」を上映し、学内映画ファンから好評を博しました。著作権、上映権がクリアされたものに限られますが、順次、図書館で選定をして、名作を揃えたいと思っています。

CDコンサートは2年前に寄贈された全集ものコレクションである片田文庫の中のCDレコード6000枚の中から厳選して公開する予定です。2月、3月はモーツァルト特集「交響曲40番」「ピアノ協奏曲20番」、マーラーの「巨人」など上演しました。「こんな大きな音でくのは家では不可能なのでうれしい。」「図書館の中にこんなリラックスできる空間があるのを知らなかった。」「勉強の合間の気分転換になる」など感想が寄せられています。片田コレクションの特色を大いに生かし、モダンジャズ特集やタンゴ特集など幅広いCD演奏を考えたいと思います。

最後に半年分の「シネマ・コレクション」上映予定作品を紹介して、利用者のみなさまの多数の参加をよろしくお願ひします。

シネマ・コレクション上映予定作品（都合により変更することもあります。）

毎月第1木曜日午後2時から（上映時間によっては数回上映します）

平成14年5月2日	エイゼンシュテイン「戦艦ポチョムキン」
6月6日	サタジット・レイ「大地のうた」
7月4日	映画の父グリフィス「イントレランス」
8月1日	キャロル・リード「第三の男」
9月5日	ジョン・フォード「アイアン・ホース」
10月3日	オーソン・ウエルズ「市民ケーン」

乞ご期待！



図書館の動き

- | | | | |
|-------|--|------|--|
| 12月4日 | インドネシア科学院情報科学セン
タ - 図書館員 ロサ氏来館 | 2月5日 | 附属図書館大会議室空調改修工事開始 |
| 5日 | 全学図書系事務連絡会議 | 7日 | シネマクラシック開始(於:AVホ-ル) |
| 7日 | 近畿地区国立大学図書館協議会
事務部課長会議(於:阪大) | 8日 | 電子ジャ-ナルに関する
近畿・中国四国地区合同説明会 |
| 13日 | 図書館業務用新システム更新機器
説明会(14日、18日とも) | 14日 | 片田CD鑑賞会開始(於:AVホ-ル) |
| 14日 | 日本著作出版権管理システム事業
説明会(於:早稲田大)
平成13年度電子図書館全国連絡会議
(於:国会図書館) | 18日 | 館長の部局長訪問
(医学部より順次開始) |
| 17日 | 附属図書館防火訓練 | 25日 | ロシア外国文献図書館長来館 |
| 1月7日 | 図書館業務用新システム稼動 | 28日 | 開架閲覧室2階文庫本書架増設 |
| 11日 | 宇治分館運営委員会
図書館業務用新システム説明会
(25日まで) | 3月1日 | 法人格取得問題に関する附属図書館懇
談会図書館評価指標検討WG(於:東大) |
| 17日 | 平成13年度国立大学附属図書館
事務部長会議(於:山形大学) | 11日 | 外国雑誌センター館会議(於:東工大) |
| 28日 | 平成13年度第4回商議會 | 14日 | 国立七大学附属図書館長懇談会(於:東大) |
| 30日 | 全学図書系事務連絡会議 | 18日 | 平成13年度近畿地区国公立大学図書
館協議会第2回講演会
(於:AVホール、日本語・中国語・韓国
語の名前典拠ワークショップ)
モンゴル国教育科学技術文化副大臣、
中国教育部国際司参事官来館 |
| | | 20日 | 平成13年度第5回商議會 |
| | | 27日 | 全学図書系事務連絡会議 |

目次

宮崎市定コレクション	1
嵯峨本「史記」など古活字版諸種について	6
『幼学指南抄』が重要文化財に指定されました	8
経済研究所図書室紹介	9
第14回国立大学図書館協議会シンポジウム(西地区)に参加して	10
電子図書館利用状況(平成10年~平成14年2月)	12
図書館業務用電子計算機システムの更新	13
教官著作寄贈図書一覧(平成13年12月~平成14年2月)	14
シネマ&CDコンサ-トについて	15
図書館の動き	16
目次	16
編集後記	16

編集後記

春。大学はまもなく新入生、新入職員を迎えにぎやかなキャンパスが展開されます。時の過ぎ行くスピードは年々加速度を増し、1年の速さについていけない自分を感じています。そしてどうにか年4回の静情を発行できたことを喜んでおります。

大学法人化まであと2年、それまでにしなければならないこと、考えておかねばならないことがたくさんあります。図書館の将来は全学の研究者・院生・学生・職員が真剣に取り組んでこそ、夢のある未来が見えてくるのではないのでしょうか。(C)